

視点

子どもの健やかな育ちこそ、 素晴らしい未来であり希望です！

一人の教育は「不連続の連続」であり、想像を絶する展開をしている—

東京家政大学大学院人間生活学総合研究科長 大澤 力



世界で最初に幼稚園を創設したフリードリヒ・フレーベル【ドイツ:Friedrich Wilhelm August Fröbel】は、その名著「人間の教育」において、人の育ちの筋道を【不連続の連続】という表現を使って著わしております。現在、著者は奉職する学校法人渡辺学園東京家政大学【明治14（1881）年創設：140年間続く世界でも希少な女子教育の伝統校】において、令和3年4月1日から縁あって●大学院人間生活学総合研究科長●子ども支援学科教授●附属女子中学校・高等学校校長という3つの職種を掛け持ちするという本学一の多忙な立場に就任しております。そして、仕事は毎朝の附属中高朝礼からのスタートとなっており、様々な課題と常に向き合い、良き仲間と工夫しながら一つ一つ丁寧に精力的にこなしつつ、忙しくも遣り甲斐ある毎日をご過ごしております。さらに、数十年前にはバスの運転や幼稚園教諭、主任、園長代理など、様々な幼児教育現場での職種経験もございます。こうした初等教育＜幼児教育＞、中等教育＜中学校・高等学校教育＞、高等教育＜専門学校・短期大学・大学・大学院教育＞に関する学修と実体験を通し、フレーベルの云う【不連続の連続】を初等教育＜天真爛漫な幼少期＞、中等教育＜人生に悩み落ち葉の散る様子に涙し、お箸の転がることに嬉々として喜ぶ思春期＞、そして高等教育＜自身の人生創造に力強く踏み出す青年期＞というように、日々の実体験を通した心底から全身全霊が揺さぶられる感動を深く味わう毎日をご過ごしております。

新米附属中学校・高等学校校長、就任早々10日後の入学式、居並ぶ新入生を目前に「本学を皆さんとともに光り輝く日本一、世界一の学びの園へと創り上げて行きたい！」といったお話をさせていただいた瞬間の子どもたちの目の輝き、それは凄まじい

光を放って居りました！本当にビックリしました。こうした状況は、大学教育の場や幼児教育の場における展開と一味も、ふた味も違った素晴らしい実体験として私に襲い掛かって参りました！^{まさ}に、人の教育は同一の人物において展開される【連続性】を担保した、その時々^{まさ}の育ちに見合った大きな質の違い【不連続性】を包含した想像を絶する展開を繰り広げているといったことを実感し、深く噛みしめた最初の素晴らしくも貴重な体験でした。

さらに、本学は明治14（1881）年創設：2021年で丁度140周年を迎えた女子教育一筋の学園です。東日本大震災（2011年3月11日）からはじまる昨今の天変地異、そして新型コロナウイルスのパンデミック、未だ不透明な毎日が続く最中、間違いなく「子どもの健やかな育ちこそ、素晴らしい未来であり希望です！」。

フレーベルの云う「不連続の連続」や140年間に及ぶ女子教育の歴史と伝統など、こうした教育の原点を確実に受け止めながら、一步一步着実に前向きに、前向きに、前向きに明るく元気に真っすぐに、前を見つめて進むことこそ、今一番重要なことかと存じます。改めまして「子どもの健やかな育ちこそ、素晴らしい未来であり希望です！」を肝に銘じ、こうした歴史と伝統を確実に受け止め実践してゆく教育実践こそが、昨今の不安定な時代に最も重要な不易という不滅の指針を与えるものと確信し、さらに次の時代を創造する教育の「新」をも模索し、真と新の教育の核心を探りつつ、良き仲間と共に力強く教育実践を展開し、【日本一・世界一の女子教育の創造】を期し、150周年に向かうことが、我が学園の日常であり、今、私が一番願いつつ実践していることであります。

良質な幼児教育とは（1）

全日本私立幼稚園連合会

会長 田中 雅道

1991年、学校評価制度が始まったイギリスの幼稚園を2園訪問しました。

最初に伺った幼稚園はロンドン市内にあるマンション内にあり、出入り口を挟んで2部屋と2階の一部を使ったこじんまりした幼稚園で、園庭はマンションの小さな庭だけでした。その園では、新しいカリキュラムを作成して運営を行っているという触れ込みで、毎日時間割を定めて教科的な指導をしていましたが、その内容は教科書を使ったという固い授業形式ではなく、各時間の目的を持った設定保育的な内容であったと記憶しています。その幼稚園は市内に複数の施設を展開する予定なので、カリキュラムの写真撮影などは禁止しており、保護者の評判もいいという触れ込みでした。

もう一つの園は、ロンドン郊外の日本人が多く住む地域にある幼稚園で、ほとんどの園児がロンドン在住の日本人子弟でした。広い芝生の園庭を囲んだ周囲に園舎が建っていて豊かな自然環境に囲まれた幼稚園で、保育内容は日本の良質な幼稚園という印象でした。教育省の評価について尋ねてみると、数日間保育を観察しいろいろと質問されたが、改善点としてはイギリスの税金を使って教育を行っているので、園内の表記を日本語だけでなく英語でも表記するようにという指摘を受けたとのことでした。

教育省の評価は、どちらかというと施設内の遊び道具や教材など、子どもが直接触れる遊び環境の具体的な内容を評価項目としていることが多く、評価のしやすい“教育省が定める良質な環境基準を有しているかどうか”を指標としており、それぞれの遊び道具を子どもがどのように使用し、それを使って子どもの遊びにどのような工夫があるかといった保

育内容に踏み込んだものではなかったもので、それぞれの幼稚園とも保育内容に大きな違いがあるにもかかわらず教育省の評価は同じであったことが印象深かったです。

日本で幼児教育の質の評価が議論され始めたころ、多くの方は外国の評価指標を、日本の幼児教育の実情に合った、客観的な指標にどのように変換するかといった視点で改定作業をされていたように思っていました。私は、教育の評価を行う場合、教材などの環境に視点を当てている限り、最低限の資質底上げには資するもの、より高いレベルへの変化を求める評価にはならないと感じていました。評価を受ける園が“参考になった”“これからの園運営に役に立つ評価だった”と実感してもらえる評価とは何かを考えてきました。

一方、“良質な幼児教育”という言葉の基、日本の私立幼稚園、認定こども園が評価を通して、その評価基準に合わせるようになり、均質化することは避けなければならないと考えていました。公立の教育機関は同じ内容の教育を提供することが求められます。したがって、公立幼稚園は全国どこに行っても同じ内容の保育を提供することが役割なのです。公的な役割としては当然のことなのですが、その延長上には各施設が切磋琢磨して成長していく姿は想像できません。私学の良さは、多様な資質を持った教育機関が存在して、それぞれの地域を面でとらえて、保護者が選択して、幼稚園、認定こども園と共に成長していく関係性が必要条件だと思っています。良質とは、それぞれの園の内に常に向上心を持って変化していく姿と考えています。

●令和４年度 幼稚園関係予算案（概要）

本連合会では、加盟園（令和4年1月26日付）に対して、発出致しました『令和4年度 国の予算確保活動の現況報告（地方交付税関係）』の資料を以下の通りに記載します。

同様の資料を全日私幼連ホームページにも掲載しておりますのでご確認ください。

【全日私幼連ホームページURL】<https://zennichishiyouden.com/news/news2021#element2>

全日本私立幼稚園連合会 会長 田中 雅道

令和４年度 国の予算確保活動の現況報告について
（地方交付税関係）

日頃、本連合会の諸活動に対しご理解ご協力いただき、誠にありがとうございます。
先日、国の令和４年度・幼稚園関係予算案の概要についてお知らせいたしましたが、
本日は、地方交付税の園児１人当たり単価についてご報告いたします。

厳しい財政事情の中、格段の地方交付税措置を達成

○ 地方交付税の園児１人当たり単価を 170,100 円に増額
対前年度 2,000 円増

○ 国庫補助金とあわせて 194,798 円（2,220 円増額）を確保

園児１人当たり 単価（円）区分	３年度	４年度	前年比・伸び率（％）	前年比増額
地方交付税	168,100	170,100	1.2	2,000
国庫補助金	24,478	24,698	0.9	220
合計	192,578	194,798	1.2	2,220

※ 私立幼稚園分には、このほか、預かり保育推進分 2,200 円（対前年度：同額）及び
私立幼稚園教員の人材確保支援分 1,600 円（対前年度：900 円増）が措置されてい
る。

令和４年度予算については、加盟園のご支援・ご協力をいただきながら折衝活動を続
けた結果、厳しい財政状況にもかかわらず、このような幼稚園関係予算を獲得するこ
とができました。誠にありがとうございました。

令和3年度・第5回政令指定都市特別委員会研修会

1月17日、東京・アルカディア市ヶ谷において全日私幼連令和3年度・第5回政令指定都市特別委員会研修会が対面とオンラインを併用した形式にて開催され、全国から122名（対面16名、オンライン106名）の先生方が参加しました。

はじめに、四ツ釜雅彦・全日私幼連副会長より開会のことばがあり、続いて松尾創・全日私幼連政令指定都市特別委員長より趣旨説明がありました。第1部では松本向貴氏（文部科学省初等中等教育局幼児教育課専門官）よりご講演いただきました。第2部では田中雅道・全日私幼連会長よりご講演いただきました。研修会内容は以下の通りです。

●第1部（松本向貴氏）

演題：「未来に向けた幼児教育の展望について」
以下の項目に沿ってご講演いただきました。

1. 「経営」の視点から／2. 「教育」の視点から／3. 人材確保・資質向上／4. 「行政との関係」の視点から／5. これからの幼児教育・保育

●第2部（田中雅道会長）

演題：「政令指定都市・中核市における幼児教育に期待すること」

以下の項目に沿ってご講演いただきました。

1. 幼児教育スタートプラン（仮称）／2. 処遇改善の行方／3. こども家庭庁／4. 幼児教育義務化／5. 少子化対策／6. 政令指定都市での幼児教育施設の今後／7. 私学助成幼稚園・認定こども園のこれから

最後に、金子真理子・全日私幼連政令指定都市特別副委員長より閉会のことばがあり、研修会は終了しました。



松本向貴氏（文部科学省初等中等教育局幼児教育課専門官）



田中雅道・全日私幼連会長

保育力の向上のために

資質向上の取組の証明に

キャリアパスや免許更新のために
研修の記録を大切に残しておきましょう！

監修 一般財団法人 全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

改訂新版 研修ハンドブック

4145301 **税込 660 円（本体 600 円）**

ご用命は最寄りのワンダー販売会社、または書店まで

 **世界文化ワンダー販売**

Tel. 03-3262-5128（営業）

- B6判
- 112ページ



令和3年度・102条園委員会研修会

1月24日、東京・TKP市ヶ谷において、全日私幼連令和3年度・102条園委員会研修会がオンライン形式にて開催され、全国から58名の先生方が参加しました。

はじめに、四ツ釜雅彦・全日私幼連副会長より開会のことばがあり、第1部では高田治樹氏（株式会社GTM総研・GTM税理士法人税理士／元・東京国税局資産税課課長補佐）よりご講演いただきました。第2部では田中雅道・全日私幼連会長よりご講演いただきました。研修会内容は以下の通りです。

●第1部（高田治樹氏）

演題：「個人立幼稚園の税制について一相続税非課税制度を中心に」

個人立幼稚園における教育用財産に対する相続税の非課税制度について、具体的な事例を取り上げ、課税庁側の認識や調査の視点を交えながらご説明いただきました。講演の後には、参加者からの事前質問および当日質問（チャット形式）に対し、ご回答いただきました。

●第2部（田中雅道会長）

演題：「全日本私立幼稚園連合会の現状と今後について」

以下の項目に沿ってご講演いただきました。

1. 幼児教育スタートプラン（仮称）／2. こども家庭庁／3. 幼児教育義務化／4. 少子化対策／5. 処遇改善／6. 幼児教育施設の今後



高田治樹氏（株式会社GTM総研・GTM税理士法人税理士／元・東京国税局資産税課課長補佐）



田中雅道・全日私幼連会長

102条園をはじめとする全国の私立幼稚園・認定こども園等が各地域での子育てネットワークの中核をなし、全日私幼連が支える機関として機能することが求められることを説明されました。また、すべての子どもが良質な教育を受けられる仕組みづくりを全日私幼連から行政へ提言していきたい旨が述べられました。

最後に、溝渕真澄・全日私幼連102条園委員長より閉会のあいさつがあり、研修会は終了しました。

なお、本研修会の様子は、全日私幼連ホームページにて2月28日まで加盟園限定で公開いたします。下記QRコードおよびURLよりご視聴できますので、ご確認ください。

(<https://zennichishiyouden.com/shiryo-page>)

QRコード



簡単更新!

ホームページ

書きかえるん

♪スマートフォン表示に対応したデザインです!

園様自身の簡単操作で文字や写真等がらくらく更新! タイムリーに情報を発信できるホームページです。

株式会社 チャイルド社 コンピュータ部 ICT 課

〒167-0052 東京都杉並区南荻窪 4-37-15

<http://www.child.co.jp/> TEL: 03-5370-7497

災い転じて福と為す

一般財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
理事長 安家 周一

「災い転じて福と為す」ということわざがありますが、今まさにコロナ禍の真ただちにある私たちは、運命とも考えられるこの時代を、いかに「福と為す」ことができるのかをみんなで考えなくてはならないと思います。

幼児教育研究機構（以下機構）は文科省から認定を受けた免許状更新講習実施団体として教員免許更新講習を幼児教育に特化した講習として実施してきました。小中学校教育とは一線を画した教育方法である幼児教育であることから、幼児教育者向けの講習を用意し、受講者アンケートで見る限り、講義内容も含めて多くの方々から「もっと早く聞きたかった」「よくわかった」「新しい教育要領の理解が進んだ」などの賛同を得ていました。その結果として、受講手数料収入が機構の財政を健全に運営することができる原資となっていたことは事実です。

すでに報道にもありますように、中央教育審議会では、免許状更新講習の改編について、政府からの諮問案件を議論の結果、免許状更新制度を発展的に解消し次期国会で審議の上、教員免許法が改正されることが確実視されています。予定では7月頃にはその案件が審議され、令和4年度より、免許状更新制度は事実上廃止となります。これまで現職ではなく、免許状更新講習を受講していなかった幼稚園教諭免許保持者たちも、免許状の効力が復活し、そのまま現場に立つことができるようになります。

免許状更新制度の発展的解消後は、各施設の学校長・園長の管理のもと、10年間で約60時間程度の研修を受講し、その履歴を蓄積することが求められます。この研修は、キャリアアップ研修や外部の研修の受講にとどまらず、園内研修やワークショップなどの実技、運動系など多岐にわたり認められることになります。

そのような制度変更を機会に、機構では幼稚園ナビの研修機能部分を乳幼児の保育者が研修するためのシステムとして再構築し、名称もふさわしいものに変更する予定です。具体的には、研修のための図書館＝研修ライブラリーをネット上に構築し、全国の教職員が、主体的に時間や場所を選ぶことなく研修を選択し受講できるような環境を整えるべく、システムを検討中です。従来の「幼稚園ナビ」の登録情報を利用したいと思っていますが、残念ながら、園長先生方の登録が少ないことも現実問題として報告されています。まずは、各園の園長が幼稚園ナビに登録し学ぶ姿勢を教職員に開陳することが教職員の研修意欲につながり、研修受講機会を得ることにつながる必須の条件です。

そのためには、「保育者としての資質向上研修俯瞰図」を拡大的に見直す必要があります。それは、園で働くすべての職種の人たち、事務職、栄養士などの調理関係者、バスの運行関係者、看護師などの学びについても広範囲に包含することになります。今後、研究研修委員会を中心に検討を進め、令和4年度中の完成を目指します。

予期しなかった事態に直面し、右往左往していましたが、この機会に、従来の研修俯瞰図の拡充を成し遂げ、一気に進んだデジタルの便利さを利用し、時間、費用を節約しながら教職員の資質向上を目指したいと思います。幸い、文科省からも熱い視線が注がれているため、行政側からの意見も参考に、共同開発できればうれしく思います。

日本私立学校振興・共済事業団の融資

幼稚園の経営者のみなさん、こんなお悩みはありませんか？



園舎が古くなったので、安全性を考えて建て替えたい

● 耐震化事業に関する利子助成制度です。ぜひご利用ください！

対 象

- 旧耐震基準の園舎建て替え
耐震化促進のための補助金
(私立学校施設整備費補助金等)
の対象となる改築事業
- 耐震補強工事・非構造部材の
耐震対策事業
防災(耐震)機能強化のための
補助金の対象となる改修工事

事業団の融資

この融資制度は文部科学省から私立学校施設高度化推進事業費補助(利子助成)を受けることが出来ますので

全借り入れ期間
実質0.5%の
固定金利です。

※融資金利が0.5%以下の場合は
利子助成は行われません



融資上限＝補助対象事業費－補助金



給食室を増築したい
けど資金が…



最新の金利は
私学事業団の
ホームページに
掲載しています。

● 通常の融資もご相談ください。

低利・固定金利
20年間の
借り入れが可能！

返済方法は
利息負担の少ない
元金均等返済

主な事業と融資金利（令和4年1月現在）

主な事業内容	返済期間（据置年数含む）		
	20年以内	10年以内	6年以内
【一般施設費】 園舎・給食室などの建築・用地取得	0.60	0.32	0.403 年%
【教育環境整備費】 通園バスや校教具などの購入	—	0.32	5年6か月以内 0.302

※融資金利は毎月見直しています。金利は融資契約時点の金利が適用され、償還までの固定金利となります。
※上記費目以外にも災害復旧事業、公害対策事業等が対象となります。

● 融資条件が一部優遇されます

令和4年度の私立幼稚園・認定こども園を対象とする私学事業団の融資について、融資条件が一部優遇されます。

☆ 融資率の優遇

園舎等の建築、土地購入 事業費の80%以内 → **95%以内**
園舎等の改修 事業費の75%以内 → **95%以内**

☆ 資産査定額の優遇

(直近決算の)純資産の部合計額 × 30%
→ (直近決算の)純資産の部合計額 × **40%**

※上記以外にも融資条件があります。詳しくは私学事業団ホームページをご覧ください。

◇お問い合わせ◇
日本私立学校振興・共済事業団
融資部融資課まで

☎ 03 (3230) 7862～7868 ✉ yushi@shigaku.go.jp
https://www.shigaku.go.jp/s_yushi_menu.htm
〒102-8145 東京都千代田区富士見1-10-12

おはよう！！「きょうはなにをしようかな」

～子ども達と一緒に創る、わくわくする園庭～

○川名マミ（菊の花幼稚園園長） 中橋美穂（大阪教育大学教授）
川名ミカ（菊の花幼稚園総括主任）穴原万希（菊の花幼稚園教諭）
西野結女（菊の花幼稚園教諭） 川上大樹（菊の花幼稚園教諭）

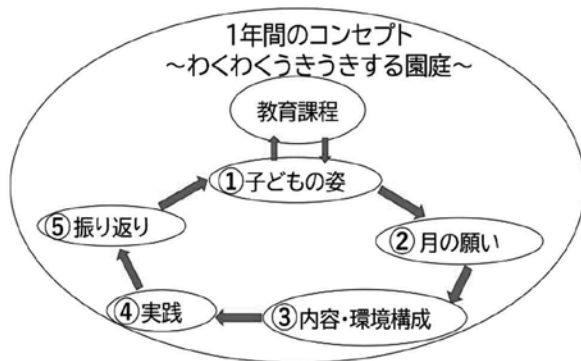
1、本研究の目的

本園では、子ども達が登園した際に初めて通る場所が園庭である為、自分の保育室に向かうまでの道のりで、子ども達は何に興味関心を持つのか、どんなアプローチがあればただ通過する場所ではなく、楽しむ事が出来るのか、ただ広い場所としてだけではなく、今後能動的に人・物に関わる力を育てたり、遊びのイメージを膨らませる場にする為に園庭環境の在り方を探った研究である。

2、一年間のコンセプト

研究をするにあたり、園庭の担当者三人で一年間どんな園庭にしたいのか話し合い、園庭にしかできない遊びをめいっぱい楽しめるように、また、園庭環境を子ども達が自分で考えて使えるようになどの願いを込めて「わくわくうきうきする園庭」というコンセプトに決まる。

3、取り組み方



※各月三日連続でビデオを撮り子どもの姿を追ひ、その都度振り返り、課題を見つける。

4、三つの柱

今回、わくわくうきうきする園庭を創っていく上で、

- ①きょうのみいつけた
- ②保育室までのどう（導・動）線
- ③遊び

の三つの柱を元に考えていくことにした。

①きょうのみいつけた

園庭に入って1番最初に目に入るところに、動植物や遊びの紹介など、子どもたちに知ってほしい事や五感を刺激するようなものを置くコーナー。置いているものをきっかけに、幼稚園に来ることを楽しみにしたり、保育室へ向かうまでに楽しい気持ちになるように。そして色々なものに興味を持ち、遊びのイメージを膨らませるように…という思いを込めている。

②保育室までのどう（導・動）線

保育者が子どもたちを導くような環境作りをしたときは導く線と書いて、『導線』。子どもたちが実際動いた姿を表すときは、動く線と書いて『動線』の2種類を使い分けている。

③遊び

遊びの中でも、固定遊具で遊ぶものと保育者が意図して置いた、季節に応じて出す遊びや、子どもたちが自分たちで考えて遊べるものなど、様々な遊びがあるが、今回はこちらが意図して置いた遊びのコーナーに特化して、そこで遊ぶ子どもたちの姿をまとめている。

5、内容

①みいつけた

四月～五月連休明けまで

今年度から始めたコーナーの為、置き方や掲示の仕方をメインに工夫をし子ども達にまずは興味を持ってもらう。

五月連休明け～六月まで

少しずつ園に慣れてきた為、園庭でどんな遊びができるのかを知り好きな遊びを見つけれられるように遊びの紹介をした。

六月～

みいつけたにより興味を持ち始めた為、継続性のあるものを置いた。



継続性①アリの巣の変化
（一週間ごとに置く）



継続性②降雨量
（雨の日に置く）



継続性③植物
（生長に応じて置く）

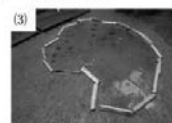
②どう（導・動）線

四月～五月連休明けまで

プランターで花道を作ったり薪で線路を作るなどし期待を持って登園した子どもも不安な気持ちを抱えて登園した子どもも楽しい気持ちで保育室まで迎えるように、また保育室の道順がわかるようにした。

五月連休明け～六月

季節に親しめるようにした。（1こいのぼり）（2雨の音）（3水たまり）



六月～

みいつけたで紹介したものを園庭の子ども達の目に入るどこかに置いておいた。

③遊び

四月～五月連休明けまで

素材などを用意しておき環境を整えすぐに遊べるようにした。4月末からは、もう少し園に慣れるよう、より遊びが見えるコーナー作りを行なった。

五月連休明け～六月

5月の振り返りの際に保育者が園庭を整えすぎた事から、植物の扱い方や素材を見つけるチカラが育っていない事に気付いた為、素材の準備を子ども達と一緒にし、子ども達と遊びの環境を整えていくようにした。

六月～

6月の半ばには素材の準備が自分たちで出来るようになってきた為、1日だけコーナーはあえて作らない環境構成で自分たちで環境を創り出せる経験と遊びの経験が豊富な年長児にしてもらう。その様子から、その時々々の環境に順応している事と、その反面、使いたいものを保育者に出してほしいとお願いしたり、自分で用意したりする事が出来ないという事が分かった。その事から、自分たちで物を出す経験がなかったのではないか、その為、物の場所を知らないのではないか、と考察しそれ以後、コーナーは作っておくが、机や椅子などは出さず、子ども達と一緒に準備をして物の場所を分けるようにした。

6、結果

みいつけた

- はじめは・・・
- ・通り過ぎる子が多い。
- ・大人（保育者や保護者）の声掛けがないとみない。
- ・泣いて登園

継続

- ・毎日期待を持ち、楽しみにするようになった。
- ・楽しみにする保護者も増え、親子の会話が増えた。
- ・朝の忙しい時間にもホッと一息できる場に。
- ・笑顔で登園

子どもたちが園庭にあるすべての物に興味を持ち、目を向けようとする、視野の広がりや気づく力がついた。

「なんでだろう?!」から「もっと知りたい!」という『探求心』が育まれた。

遊びを広げる力に繋がっている

どう(導・動)線

はじめは・・・

保育者が花道や線路、薪の道などの導線を創ると保育室までの道順が視覚的にわかり、安心して、楽しみながら通っていく。

園に慣れると

道順がなくても安心して保育室に向かえるようになる。

みいつけたで様々な物に興味を持つ力がついたのでこちらが意図して創らなくても自分たちで楽しみを見つけ保育室へ向かうようになった。

遊び

はじめは・・・

- ・保育者と一緒に遊び、どんな遊びがあるのかを知る。
- ・保育者が用意した物で遊び楽しむ。

好きな遊びが見つかる

- ・友だちと遊びを楽しむ。
- ・したい遊びのイメージを膨らませ、保育者と一緒に準備を行う。

- ・道具の使い方や遊び方を知っている為、初めから遊び込む。

様々な経験

- ・より遊びが広がる。

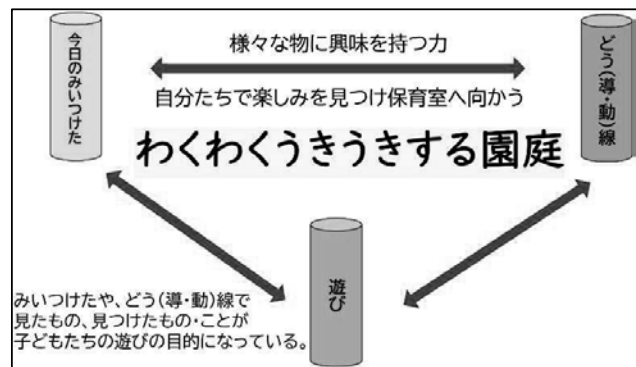
今日のみいつけたや、どう(導・動)線で見たもの、見つけたもの・ことが子どもたちの遊びのきっかけになっている。

登園時に遊んでいる友達と遊びの相談をして、より遊びの目的が明確になる

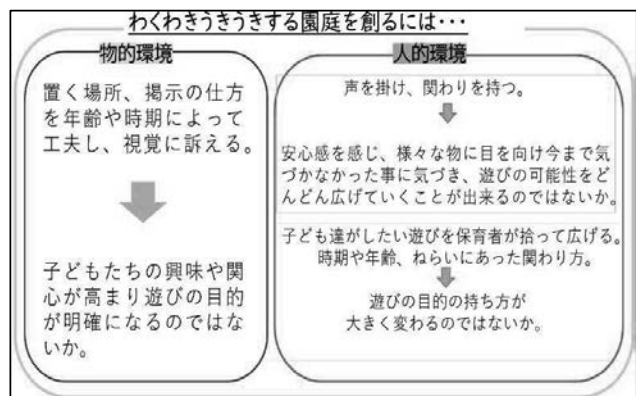
7、総合考察

三つの柱を元に取り組み、図(1)のように「わくわくうきうきする園庭」を創るには三つの柱が繋がっているのではないかと考えた。その事からわくわくうきうきする園庭というのは子ども達が目的を持って園庭に出てきてくれることで創っていけるものではないかと、そして、わくわくうきうきする園庭を創る為には物的環境面と人的環境面の二面から様々な工夫、配慮が必要ではないかと考えた。図(2)

図(1)



図(2)



そして図(2)のような事をただ園庭だけがやっているだけでは意味がなく、1番長く過ごす保育室で1番信頼のできる担任の先生にも園庭の話をしてもらう事でみいつけたやどう線で見出した楽しみをより遊ぶ目的にすることができないのではないか、と考えた為、『わくわくうきうきする園庭』を創っていくには、園庭と保育室とが『お互いに相互作用させる』ことがとても大事だとわかった。

8、今後の課題

1学期中も子ども達が主体的に遊ぶ姿がたくさんあったが、この1学期中に様々な経験をしてきた事で2学期以降ではより子ども達が主体的に遊ぶ様子が見られると思う。その為、物的環境面では年齢やねらいに合わせ、物の置き方、出す物を工夫する。また人的環境面では子ども達発信の遊びを広げていくために、遊びの様子を保育室とすり合わせ保育室との連携を取っていきたい。さらに、引き続き保育者にアンケートを取り、遊びのアイディアを共有したり、園庭だよりを出して園庭の情報を共有していき、子どもたちと一緒に担任の先生や保育者全員でわくわくうきうきする園庭を創っていきたい。

異年齢交流での子どもたちの育ち

村田 千子 (神崎幼稚園) 森本 綾子 (神崎幼稚園)
多喜田真由子 (神崎幼稚園) 勝浦 美和 (四国大学)

1. 提案にあたって

本園は、異年齢の子どもたちの関わりが多く、年少児が年長児の保育室で遊ぶ姿や園庭で年中児と年長児と一緒に円形ドッジボールやかくれんぼ・竹馬をする姿など、異年齢児が誘いあって遊ぶ様子が頻繁に見られている。また、満3歳児・3歳児のお昼寝の時間になると、年長児数人が寝かしつけにいたり、泣いていたり困っていたりする子がいれば声をかけ、先生のところへ連れていく姿が見られる。子どもたちは、これらの異年齢交流を通して、年長児に対する憧れや年少児に対する思いやりの気持ちをもちながら、活動への意欲や自信を培っていると推察される。そこで、異年齢交流における子どもたちの育ちに焦点をあて、実態を明らかにするとともに、保育者の関わりについて考える機会とした。

2. 園内研修の活用

「中坪史典編, 2018, 保育を語り合う「協働型」園内研修のすすめ, 中央法規」を参考に、KJ法, TEMを用いて園内で見られる異年齢交流を可視化した。

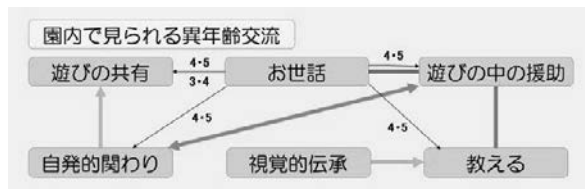
1) 自園で行われている保育内容の共有

- ①異年齢で構成した2つのグループに分かれ、園庭、保育室で見られる異年齢の関わりを図面上に書き出す。
- ②場所ごとに分類して提示する。
- ③似ている姿をまとめて名前をつけ、関係性を示す。



結果として、「お世話」を中心とした6つのワードが得られ、それぞれの関係性をどう捉えるかが、保育者間で共有された。

保育者が園内で見られる異年齢交流について共有することは、これまで以上に、生活の中で自然に生まれる異年齢交流を意識し、子どもたちの関係性や保育者の援助を考えることに繋がったと推察される。



2) 自分の保育の語り

次に、事例を時系列に並べていき、環境構成、保育者の対応、友達との関わりを可視化した。

3. 事例と考察

園内研修を通して、異年齢交流に関連する事例を再検討したところ、新たな気づきが得られた。

1) 3歳児クラスの生活と異年齢児の交流

K児 (3歳児): 友達の遊びの様子を傍観
S児 (満3歳児): 保育者に依存しがち

【6月中旬】給食後、K児はいつものようにままごとコーナーでお昼寝が始まるのを待つ。S児は保育者が給食の片付けを終えるのを待っていた。待ちきれずに「先生、早く」と催促をするS児に「まだ食べてる子がいるからね。もう少しかかるかな」と保育者が応えるやり取りを何度か繰り返していた。その様子を見ていたK児が「一緒にいこ」とS児に声をかける。一瞬戸惑ったような表情を見せたS児だが、手を繋いで一緒に保育室続きの和室へ行き、ブロッ

クをしたり、追いかっこを始めたり、次第に大きな声で話し、笑い合う2人の姿があった。

3歳児クラスの生活と異年齢児の交流：3歳児・満3歳児、K児・S児

視覚的伝承	・できることを自分なりに
お世話	・「私の真似してみよう」「こうやったら上手にできるよ」
教える	・K児 「一緒にいこ」 ・S児 手を繋いで一緒に

【保育者の関わり】

- ・保護者の不安な気持ちに寄り添う
- ・幼児の気持ちに寄り添い、肯定的に関わる
- ・慣れているから、できるから大丈夫ではなく、保育者自身の関わりを疑う
- ・K児：活動への無理強いせず興味をもちそうな遊びを提案
- ・S児：1対1の関わりを基盤に安心して遊べる環境、他の子と一緒に子どもの姿を受け止め見守ることが自主的に関わる姿に繋がる

【子どもの育ち】

- ・保育者との関わりから、子ども同士の関わりへ→自信・意欲の芽生え
- ・異年齢の関係は、一方向ではなく、互いに作用し合っている

2) ちっぷすやさん（5歳児）

年中時に園庭の畑に植えたじゃがいもとそら豆。水やりや草抜きをしながら大切に育て、年長になった5月に自分たちで収穫をした。「おいしいだろうなあ」「はよ食べたい」と子どもたち。すると、その中の1人が、「あつ、ちっぷすやさんしようよ」と言うと、周りにいた子たちも「それいいなあ！」「したい！」「小さい組さんに食べさせてあげよ」などと賛同。「ほんまやな。ちっぷすやさんしよっか」と保育者。「する！」とみんなで盛り上がった。

【5月13日】翌日の“ちっぷすやさん”に向け、それぞれの係を決めたり準備をしたりする。受付係・案内係・店番係・盛り付け係の4つからしたい係をそれぞれに決め、当日の動きを確認した。

【5月14日】収穫したじゃがいもを使って年長児がクッキング。子どもたちがスライサーを使って薄くスライスしたものを保育者が油で揚げポテトチップスを作った。じゃがいもを揚げている間に、昨日作ったチケットを年少児と年中児の保育室へ配りにいく。年少児や年中児のお客さんが来てくれると「いらっしやいませ」と受付係の元気な声が聞こえ、案内係がマンツーマンで優しくお店の前へ連れていき、店番係が「どうぞ」とポテトチップスを渡す。年少児の中には初め緊張した様子で表情をこわばらせている子もいたが、年長児に優しく

声をかけられ椅子に座るとポテトチップスを食べて笑顔を見せていた。お店の奥では盛り付け係が揚げたチップスをどんどんお皿に盛りつけ、おかわりにきた子にも手際よく対応していた。お客さんたちがみんな帰ると、「大人気だったなあ」「忙しかったわ」と言いながら、目を輝かせていた。その後は自分たちも交代でお客さんになり、ポテトチップスを味わった。

ちっぷすやさん 年長児・年中児

視覚的伝承	・年中の時に年長児にしてもらった経験 憧れ
自発的関わり	・「ちっぷすやさんしよう」「小さい組さんに食べさせてあげよ」
遊びの共有	・役割分担、準備、チケット配布、おもてなし ・ちっぷすやさん

【保育者の関わり】

- ・“やってみよう”という思いを保育者が受け入れ、時間や場を確保
- ・遊びや活動に必要なことやものを読みとり、その都度対応
- ・異年齢交流の偶発性→保育者自身が気持ちにゆとりをもって生活
- ・クラスや園全体の活動として計画的に進めていくことも必要

【子どもの育ち】

- ・友達と一緒にイメージを膨らませながら協力 協働的な学び
- ・役割分担→互いのよいところを認め合う 自信 思いやり
- ・自分たちで決めた係をしっかりとこなしていく 主体性 仲間意識
- ・遊びの中心である年長児だけでなく、年少児や年中児にも影響

4. まとめ

事例検討を行う中で、幼児の発達段階によって保育者の関わり方や援助は違ったものになることが再確認された。異年齢児の交流においても、それぞれの年齢の育ちを土台として、年上の子は自然に年下の子を思いやり、年下の子はしてもらったことや見聞きしたことに対して尊敬や憧れを持つ姿が見られる。そのような自然の流れが日常生活を豊かなものにし、子ども同士の活動がより活発なものになるのだと思われる。個々の性格や育ちを十分に理解した上でありのままの幼児を受け入れ、小さな成長や変化にもしっかりと目を向け認めることで幼児の活動意欲は大きく変わるのだと改めて感じた。そこで、保育者はどんな時も焦らず、ゆったりとした気持ちで幼児一人一人と関わり、その力を信じて長い目で見守ることが大切だと考えられる。これからも、園内研修を充実させることで共通理解を図り、全職員で全園児を見守りながら、異年齢児の交流を継続していきたい。

3年間のつながりと積み重ねから捉える保育実践の考察

立田祐理（学校法人リズム学園恵庭幼稚園）/田村めぐみ（札幌国際大学短期大学部）

1、研究を始めるにあたって

幼児理解をしようと日々の保育の中で、様々な取組が行われているが、目の前の子どもの姿を捉えようとするあまり、子どもを点として捉えてしまう可能性があるのではないかと考える。1年毎や入園から卒園まで子どもの育ちを見通した保育を実現することが求められている中で、どのような手立てがあるのかを明らかにしていきたい。

2、CAPD→OODA（ウーダ）サイクルへ

自園では、PDCAサイクルを軸にCAPDサイクルで毎日の保育を創っている。例えば、畑の活動でさつまいもを収穫し、たくさん数が獲れたことにより、下級生や上級生を招待したいと言うお店屋さんプロジェクトが発生。メニュー思案、チラシ作成、移動販売の車作り、看板装飾創り、衣装作りという一連の流れは、子ども達の興味関心から生まれ、活動から派生し、保育教諭の計画によって実践へ移行していくものである。毎年行われる物でも、期間を決めて取り組む物でもない。しかし、立田は「Plan」の部分では保育教諭が行っているものではないかと考え、より子ども主体の保育を目指すために「OODA」サイクルで保育を組み立てていった。



しかし、日々目の前の子どもを見て保育を組み立てるため、自由度がとてつもなく高い。その年の子どもや保育教諭の組み合わせで色が出ることにより、大切にしてきたことが途切れ、3年間の積み重ねや繋がりが得られにくいのではということに気づいた。

3、3年間の繋がりを大切に考える

ここで自身の3年間の保育の積み重ねのイメージを図にしてみた。



3歳児は様々な安心を土台に、それぞれの遊びを通してシンプルな感情を見つける。キャッチコピーにすると「めばえ」。



4歳児は、遊びの中で感じる「不思議」「うまくいかない」を出会い（人・モノ・コト・智慧）を通して試行錯誤の中で解決し、個性やアイデアを作っていく。キャッチコピーは「夢限大～unlimited～」



5歳児は、友達と共働することが楽しい時期。子ども達主体のプロジェクトの中で意見を出し合い、個性を爆発させ、化学反応を起こしていく。それぞれのタイミングや分野で個性を出し合い認め合い、友達と智慧や力を併せれば何だってできるということを学んでいく。「ONE TEAM～Not in a day～」

4、日々の保育を積み重ねる中で

3年間の積み重ねのイメージを掲げながら、毎日の保育の中で大切にしてきたことがある。

私が大前提として大切にしてきたこと

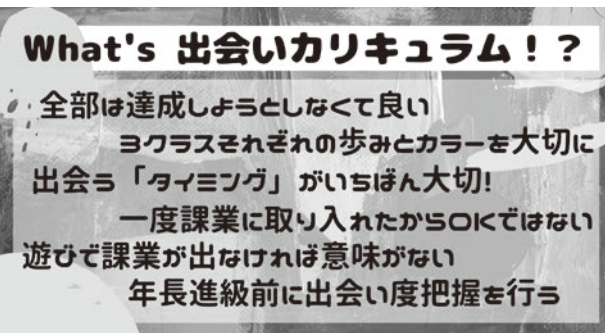
- 個性が認められる環境を
- いつでも本物を
- 片付けと整理整頓を
- 保育教諭と子どもの関係性は対等で
- 課業は出会いと位置付ける

特に「課業は出会いと位置付ける」には力を入れ、取り組んできた。保育教諭が一方的に知識を詰め込むのではなく、子どもが「今」知りたい、より活動を盛り上げていくためのタイミングを見つけて、「出会い」と位置付けて取り組んでいくことを重要視してきた。

例えば、お化け屋敷を作ること盛り上がっていたとする。例えば、吹き絵という技法を紹介し、血に見立てる。カラーセロハンとくり抜きの技を紹介し、窓に壁面を作ることによって暗さとおどろおどろしさを演出する。チケット作りで同じ大きさにしたいと悩んでいるところに折りたたんで折って開くと良いという智慧を伝える。等、興味関心が高まっている状態で出会うということがとても大切だと考える。

5、出会いカリキュラムの作成

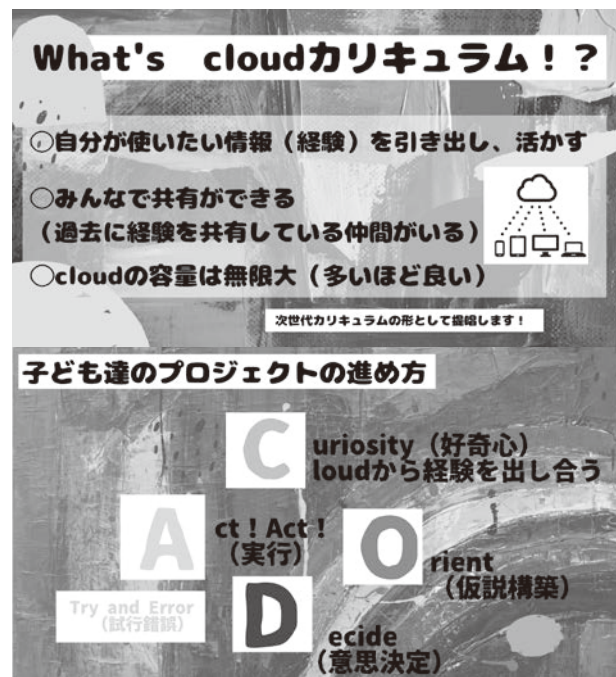
出合いを大切にする中で、年長で欲しい力から逆算して「出合いカリキュラム」を作成してみることにした。



出合いカリキュラムは「対話」「画材」「道具」「暮らし」「文化」「表現」「方法」「森」「智慧」「技法」「異文化」「地域」等、様々なジャンルからの出合いが記されている。

6、次世代カリキュラムの提唱

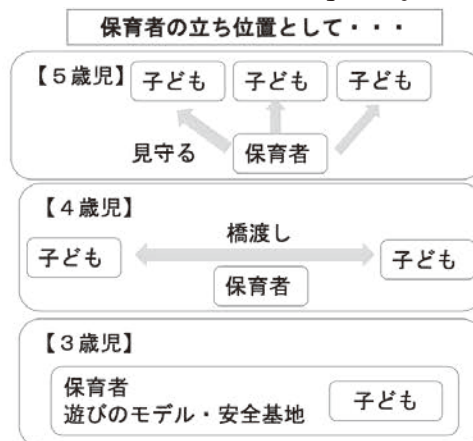
次世代のカリキュラムの形として「cloudカリキュラム」を提唱する。



また、保育教諭はOODAサイクル、子ども達はCODAサイクルでどこまでも伸びていくと感じる。見通しが立たない未来を歩む子ども達の人々が楽しく充実した毎日を送っていけるように何ができるのか考えた研究であった。

6、研究者の視点から

立田は、大切にしていきたいこととして、「保育教諭と子どもの関係は対等で」と報告をしたが、子どもたちが様々なモノと出会い、学びを深められるよう環境を整えていく中で、年齢によっては対等ではないのではないかと考える。



最後に、3年間の積み重ねの中で子どもたちのよりよい育ちを支えていくためには、保育者の子どもを見る視点が重要である。子どもが様々なモノや人との関わり、経験を積み重ねる中で、今子どもにとって必要なことは何かを見極めることが大切である。日々の積み重ねがその後の育ちにどのような影響を与えるのか、今ここにある姿を捉えるだけではなく、長期的視野を持って保育を見つめることが大切なのではないか。また、子ども園が増える中で0~5歳の更に長期的な積み重ねが求められている。

ドキュメンテーションを通じて保護者とどう対話を図るか？

―「見える化」への模索、挑戦、協働へのプロセス―

石川県私立幼稚園協会実践学会特別プロジェクトチーム～油田美沙（金石幼稚園） 山本さやか（津幡とくの幼稚園） 戸水景子（金沢幼稚園） 北口誠之（木の花幼稚園） 鮎川正（同）
共同研究者 虫明 淑子（北陸学院大学）

I. 研究の実践と経緯から・・・

本報告は、石川県私立幼稚園協会（以下、石私幼と略）が加盟園に呼び掛けて実践した各園の園内研修の「見える化」（ポスター製作）及び地区研修での共有を図る取り組み等を通じて、ドキュメンテーションを通じて保護者とどう対話を図ればよいのか？そのための障壁、課題を明らかにし、課題改善に向けた試行的な模索、挑戦、協働への新たな取り組みに関する概要である。

（１）ポスター製作の呼びかけと各園の実践

コロナ禍の R2 年度、対面型研修が組みにくい状況が生じ、一方で各園の「巣籠り」園内研修が充実している様子も見られた。そこで各園の園内研修をポスター形式でまとめ、園内に掲示し保護者への発信に活用し、そのポスターの画像を協会 HP 上に発表、加盟園での共有を図るポスター発表を加盟園に呼び掛けた（園内研修の充実をバックアップするため協会より補助金支給）。その結果、加盟園中 23 園が応募し、園内研修の中から一つ（あるいは複数）テーマを設け、その概要をポスターとしてまとめ、出来上がり次第、各園内に保護者向けに掲示してもらった。同時に石私幼 HP 上の加盟園ページにポスター掲示の枠を用意し、提出された各園の取り組みテーマ・内容を整理し、「保育実践」、「コロナ禍の保育」、「特別支援」、「環境・実践」の4つの大きな分類に区分けし HP に発表した。（右 各園ポスターの一部。中には保護者へポスターの説明会を開く園もあった。）



（２）ポスター発表交流研修会の取り組み

各園のポスター画像の提出、HP 上の発表を受け、令和 2 年度の年度末に二日間にわたり、園内研修ポスターの発表交流オンライン研修会を開催した。具体的には、交流会の参加者でポスター発表のプレゼンを希望する園のポスターの発表を 1 園あたり制限時間内（5 分）で行い、各園のプレゼン終了後 3 グループに分かれてグループディスカッションを実施。テーマ・内容についての理解を深める一方、園内研修を活性化する工夫や仕掛け、その改善の手立て、あるいは見える化の具合や保護者への発信のツールとしてどのように工夫しているか、ドキュメンテーションの在りようを討議し課題などを出し合った。（実践学会・口頭発表ではポスター発表の取り組み事例を一園紹介。「7 分間の映像で研修を！―「つながる」協働的な研修がインクルーシブな園生活を拓く―」）

（３）ポスター製作・発表・交流研修等アンケートの実施

各園のポスター製作、ポスター発表交流研修会を終えた後に加盟園にアンケートを実施し、成果や課題などを抽出。園内研修からポスター製作、掲示の仕方、保護者の反応など基本情報・ポスター製作、掲示等の取り組み、成果や課題などを整理した。特に課題に関しては、

- ① 職員自身の意識の問題（温度差）、共有や喋りやすい雰囲気づくりなど、園内の同僚性。

- ② 実務的な要素（時間の捻出、人員の課題、ノウハウ、個人情報の壁）
- ③ 保護者へ内容へのインパクト、反応、返しなどが弱いこと。伝えたい内容を如何に分かりやすくどのように伝えるか？というジレンマ、葛藤が多く園で浮かび上がった。

Ⅱ 課題の提起と新たな模索、挑戦、協働へ・・・

＜１＞課題の整理、提起と新たな模索、挑戦の取り組み

（１）課題の整理と提起～「ドキュメンテーションを作るにあたって何が問題なんだろう？！～石川県私立幼稚園協会が行ったアンケートの結果を受けて～」

上記３点の課題を整理した問題提起を口頭発表の分科会にて行い、①②の視点でグループディスカッションを行った。

（２）新たな取り組みの模索、挑戦～「みんなで集って語り合う」

その後、昨年度の反省を生かし職員共有を図るべく終礼を全員参加に切り替え新たな見える化を試みている園の報告の紹介。そのうえで③の視点でグループディスカッションを再度行った。グループディスカッション中、具体的なヒントになる実践などの報告をチャットで挙げてもらった。（ノーコンタクトタイムの導入やドキュメンテーションのフォーマット化、ICT 化等による時間節約、リアルタイムの話題、保護者のコメント欄を入れるなど双方向性に留意したり等々・・・）

＜２＞考察とまとめ

- i. 教職員間の温度差を埋め、共有を図り、時間を効率的に活用する工夫を重ねながら、活きた園内研修を構築する具体的な模索が続いている園が多くあること。
- ii. それを「見える化」する（言語化し、分かりやすく明示する）挑戦が様々な手法で模索する中で、協働的なプロセスが営まれつつある園が多くあること。
- iii. 一方で保護者に伝えたい中身が届いているか、対話的な関係が深まるドキュメンテーションか、分かりやすさと伝えたい内容（質）とそのための量とのジレンマなどに大きな課題があること。
- iv. そこでこうした課題を解きほぐすため、各園の垣根を越えて園内研修やドキュメンテーションの在り方をオープンに語り合う場、情報を交流し合う研修交流会を継続することで、ヒントやアイデアを得てステップアップするきっかけにつながっていくのでは？そのために…

＜３＞石私幼のこれからの模索、挑戦、協働へのプロセス

- （１）ポスター発表２期目（R3 年度）の呼びかけと実践
- （２）ポスター発表交流研修会２期目の企画（年に２回程度）
- （３）金沢支部研修の新たな「見える化」研究会の発足（ドキュメンテーションなど「見える化」をテーマに年間５回程度を予定。）
- （４）その他、協働的研修プログラムの実践など（研修委員会の下部組織に、若手の園長候補や各園の主任や主任候補の現場保育者等から公募した研修プロジェクトチームの取り組み）

現状ではまだ取り組みの経過途中の報告であるが、各園で園内研修をスキルアップし、保護者との対話が深まるドキュメンテーション作りを目指せるよう、そんなきっかけ作りの場としての県や地区（市町）での協会研修の「仕掛け」を継続し、地域全域での教育・保育の質の向上、保護者（社会）発信に向けた役割を担えるよう今後も努力していきたい、と思う。

本誌では、令和3年9月号から令和2年9月26日オンラインにて開催された、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターと全日本私立幼稚園幼児教育研究機構の共催による国際シンポジウム「保育とデジタル—その役割と可能性—」の内容を報告いたします。

パネル・ディスカッション

司会（野澤先生）

モデレーターは野澤が務めます。先生方、どうぞよろしくお願いいたします。では、まず指定討論の東先生と秋田先生から問い掛けていただいた内容につきまして、Fleer先生とLowings先生にお答えをいただきたいと思います。皆さまはギャラリービューでご覧いただけたらと思います。そうしましたら、まずFleer先生のほうから、秋田先生、東先生からの問い掛けについてお話しくださればと思います。よろしくお願いいたします。

Marilyn Fleer 先生

幾つか、私のほうからお答えをさせていただきたいと思います。Louiseさんのほうからもお答えがあると思いますので、お互いに行ったり来たりしながらお答えをしていきたいと思います。

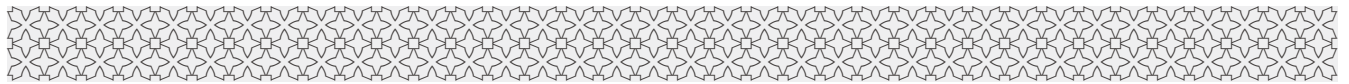
【新型コロナウイルス感染症が生み出したコンテキスト】

秋田先生のほうからもその質問がありました。デジタルディバイドやアクセスにおける格差に関する質問でした。オーストラリアの、特にヴィクトリア州におきましては、Zoomを使った家庭での学習が行われました。ロックダウンになっていたからです。元々はスクリーンタイムの懸念があったわけですが、それが消えました。というのも、スクリーンタイムがないと学習することができないからです。今は一般的な話をしているんですけども、さまざまなセンター、そして学校ですとか幼稚園で何をしようとしているかといいますと、デジタルディバイドの問題を真剣に考えていこうということです。誰にデメリットがあるのか、アクセスできないことでステイホームの間にリモートで学習できないのは誰なのか、そして、リモートで遊ぶことができない人たちは誰なのかということの検討も行い

ました。一般的な話から入りますけれども、これはとても興味深い点であると思います。これは他の国においても議論されていることだと思います。スクリーンタイムのことについてごちゃごちゃ言う人はもう誰もいなくなりました。そして、どうしたら接続を続けられるのか、そしてお互いにどうやってコミュニケーションをキープすることができるのかというところに重点が移ってきます。政府は多くのことを変えました。全国テストもなくなったわけです。幼稚園のスタッフ、学校のスタッフには、これはいいことなんじゃないかと言う人が多いんです。「一番重要なことが何かということが分かった」「家庭で子どもと一緒に遊ぶ時間が家族の中に増えた。それが重要なことだ」というふうに言っています。そして、秋田先生からもありましたけれども、家族の中で対話が増えている。そしてまたZoomなどを使うことによりまして、国境を超えてスウェーデンの子どもたちがイギリスの子どもたちと話したりといったようなこともできるようになっている。そういった環境の中でプレイグループをつくり、そしてバーチャルルームをつくって、そして家族のメンバーや子どもが関わるができるという場をつくっています。政府は助成金も出して、こういったプラットフォームの開発を行っています。私たちのPlayLabにおきましては、さらに一歩進みまして、プレイグループや幼稚園などとパートナーシップを組んで、関係構築をさらに促進していこうという試みを行っています。

【新しい状況と価値がうまれる】

これまでデジタルツールにはアクセスがない、インターネットの接続がなかったといったような人が多かったわけです。しかし、現在では、コミュニティーがお金を払ってデバイスを購入し、そして



Wi-Fiなどのコネクティビティを提供するといったことを行っています。こういったコミュニティー精神が生まれてきているんです。

そして学校におきましては、より従来型のツールを使っているところもあるのですが、Zoomのプレイデッキにおいて——つまりZoomを使って子ども同士を遊ばせるといったようなことが起きていたり、家族、家庭やコミュニティーがつながるといったことが起きているんです。こういった中核的な価値というのが、コロナにおいて浮かび上がってきました。家庭でもメディアでも、こういった中核的な価値観というものが語られるようになっていきます。Zoomを使った音楽のパフォーマンスを行ったりといったようなことも行われています。恐らく日本にもそういった事例があると思いますけれども、いろいろな人がつながってパフォーマンスをするといったようなことが行われているんです。

【新しいつながり方】

そして、デジタルディバイドに関する質問が先ほどありましたが、そこにつながっていくと思います。学習という中でも、デジタルディバイドというのは大変大きな意味を持っているんですけれども、社会的、そして情動的な発達ということを考えても、人とつながっていくということは大変重要になります。私のプレゼンテーションの中で言いましたけれども、教育を提供するときに、その子どもたちの一部しか入れないということになると、これは大きな問題になるわけです。子どもたちは自分たちの仲間とつながっていたいというふうに思うわけですから。ですので私たちは、自分たちのセンターの中でも子どもたちをつなげていくということが重要であると考えました。

Louise Lowings 先生

【新しい観点からの視野とビジョンを】

私も同意します。コロナ禍におきましては、これは私たちにとって大きなショックでしたし、しかしそれと同時に、新たな観点から物事を見るチャンスになったと思います。そして新たなビジョンを得ることができたと考えています。私たちは自分の職業的な機会を捉えて、そして新たな観点から物事を

見ていかなければいけないと考えます。デジタルメディアを学校、幼稚園で使ったり、コミュニティーで使ったりするに当たって、何ができて何ができないのかということを考えるということが大変重要だと感じました。私たちの都市でもロックダウンがありました。そしてエッセンシャルワーカー——警察や医療従事者の子どもたちのみが幼稚園に来られるという状況になったわけです。だから、多くの園児たちは家にとどまり、ステイホームの状態になっていました。ですから、それぞれの家庭において、どういったインターネットの接続状況なのか、どういったデバイスが家にあるのか。これはアンケートを取ったのではなく電話をかけて、そして一人一人聞いていきました。まず聞いたのは、元気ですか？ということだったんです。「家ではどういった状況ですか」「気分はどうですか」というふうに聞き、その後、「どうやったら、お互いをサポートし続けるためにコミュニケーションを取れるだろうか」というふうに聞きました。「子どもたちのために何ができるかということを探りたいので状況を教えてください」と聞いたんです。

【幼稚園と家庭とのつながりから】

私たちは幼稚園全体としてプロジェクトを行っており、それを保護者とも共有しています。例えばエコロジーのプロジェクト。今年は私たちの世界について探っていくというプロジェクトを行っていました。これはとてもオープンなプロジェクトで、全ての家庭が貢献することができます。床を見たり玄関を見たり、自分の庭園を見たり、そして、そういったところから、そこに何があるのかということ子どもたちに想像させるというプロジェクトだったんです。どこから電気が来るのか、水はどこに行くのか、いったい地面の下には何があるのか。もしかしたらトロールがいるかもしれないけれども、宝物が埋まっているかもしれない。子どもたちはさまざまなことを想像して、そして論理的に考えようとしません。そして現実についても知ろうとすると同時に、子どもは、想像力を働かせて、そういった現実を知ろうとするんです。こういったプロジェクトを行い、その家庭のそれぞれのメンバーが考えたことを共有



してもらおうということを行いました。

【より繊細で双方向のコミュニケーションが新しい文化に】

これは、このフォーマットであれば、通常のコミュニケーションの仕方とは違いますけれども、そして通常、私たちが対面で語るときのようにボディランゲージでコミュニケーションをすることはできませんけれども、私たちはよりセンシティブにさまざまな人たちとコミュニケーションを取ることができました。Facebook のページを使って、子どもたちのデジタル写真をアップロードしてもらったりしました。そして、保育者は学校ではパートタイムになったわけですが、そのパートタイムの時間の中でビデオを作ってもらいました。そしてそれを学校の WEB サイトにアップロードしました。例えば読み聞かせのこともありますし、庭を歩いているときに咲いている花についての動画を撮って、それをアップロードして子どもたちに見てもらおう。そして雨が降ってきたところの動画を撮って、その雨について見てもらったり。

そしてそういったことに加えて、保育者と対話する機会も持ちました。私たちは、保護者たちに何かを教えるのではなくて、自分たちが考えることを共有しようとしたわけです。そして保護者の人たちに、どのようにコミュニケーションを取りたいか——例えば子どもの写真を送ってもらったり、メモを送ってもらったり、さまざまなことを行っただけです。私たちは教育者として、その保護者から得たフィードバックを基に、私たちもフィードバックをしました。そして、このようにして家庭から出てきたアイデアを私たちがかみ砕いて、それをさらに新たなアイデアとして家庭に戻していく。その循環をつくり出していったわけです。

皆さんがおっしゃるとおりです。こういったデジタルの環境におきましては、必ずしも全ての人がそのフォーマットを心地よく感じるわけではありませぬので、それぞれの家族それぞれの子どもを個別に扱って、そしてその中で協力ということが重要であると感じました。

私たちが気付いたことを伝えるということとはとて

も重要だということが分かりました。というのは、私たちがコメントしたことでさらに反応が家庭から返ってきたからです。ですから、保育者から一方的にコメントをするのにとどまらず、保護者からも反応が得られたということがとても良かったと思っています。そして私たちは新たな文化を築いていったのだと思います。保護者の人たちがどうやったら参加できるのかということを考えていきました。

【計画・準備・評価】

今申し上げたことを、頂いた質問の「どのように計画したり、準備をしたり、どのように評価をしたり」につなげていきたいと思っています。私たちは、何かを提示するときには、その理由というのも説明しなくてははいけません。きちんとそれが説明できれば、それが想定していたように機能したのか、機能しなかったのか、それを事後的に評価することができません。場合によっては、予想もしなかったようなことが起きることによって、私たちが教育者として、もしくは子どもたちが成長するということもあります。ですから、元々考えていたとおりになったからいいというわけではないんですけれども、しかし私たちは研究者として、例えばジャーナルに記録を取る——今手元にはなかったのですが、A3 のスケッチブックに、私たちがその日何をしようと考えたのかをまず書きます。例えば、子どもたちが協力をしてこういった教材を使ってもらおう、遊んでもらうとか。例えばスウェーデンでも、長い粘土、もしくは丸くまとめた粘土、そういったもの子どもたちに用意して遊ばせます。子どもたちは自由に粘土で遊んでいいんです。しかし、私たちの提示する環境というのは、たまたまそうなったものではなく、意識的に、どのような小世界を子どもたちに示すのか、どのようなロールプレイを可能にするのか。Fleer 先生が動画作成にさまざまな物を使っていましたが、あれも偶然にその場にあったわけではなくて、いろいろ事前に準備して計画して、そこに置くことによって、子どもたちがそれを自由に使っているわけです。さまざまな準備をすることによって、そこからまたさまざまな新しい思考、新しい発見が生まれます。そしてその事前準備の過程をドキュメント

に残すことによって、また振り返ることが可能になります。

【ドキュメンテーションのプロセスが大事】

さまざまな理論があります。例えば、子どもたちは家族の歴史にすごく関心があるだろうという想定を置いていたとしても、実際子どもたちが関心を持っているのは友達との関係かもしれない。もしくは、ものがどこから生まれて、死んだ後どこに行くのか。大きいものと小さいものの違いは？ 柔らかいものと固いものの違いは？ 何に子どもたちが関心を持っているのかというのは想定とは違うかもしれませんが、そういったものをドキュメントに残していくことによって、分析することができます。

そういった意味ではデジタルな記録だけでは駄目です。やはりドキュメンテーションのプロセスというのは必要です。というのも、過去を振り返ったり、幾つかを並べて比べたり、そこからパターンを導き出したりすることができます。「確かに、3週間前に子どもが同じようなことを言っていたな」と、それを振り返っていくことができます。マラグッツィ先生はこのような考え方を推奨しています。

【「余白」で起きていることに大きな意味が】

私たちは入念に計画をし、準備をします。360度のありとあらゆる可能性の世界があります。そして、1日のありとあらゆる場面を全部録画をしたとしても、20人の先生がいて、全てを記録しようと

したとしても、実際保育室で起きていることの30度ぐらいしか捉えることができません。私たちの頭脳は素晴らしいけれども、しかし限界があります。ですから、私たちの計画や準備も限定的です。しかし、見ていないところでいったい何が起きているのか、そこを捉えなくてははいけません。そこが創造性の源泉であり、教えること、そして学ぶこと、小さい子どもと関わることの喜びの源泉であります。

子どもたちには境界線はありません。一つの学問と別の学問の間に境界線はありません。デジタルカメラとミミズの境界線もなければ、ミミズと天の川の違いもありません。全てはアイデアの生態系であり、彼らも理論を頭の中で組み立てて、その相互作用や複雑性を捉えようとしています。多くの場合、学校においてはシステムがあるので、全てを分離して、分類しようとしています。頭と心を切り分けます。しかし包括的な教育というのは、データの時代において、もしかしたら脆弱になってしまうかもしれません。今の時代、証拠、実証が重要です。しかし、数字を付けられるものというのは、われわれを取り巻く膨大なデータのうち、ほんの一部です。なので数字で捉えられないものがたくさんあります。

【ドキュメンテーションを活用したみとりと評価】

私たちの教育学、そして分析においては、ドキュメンテーションを使っています。そしてそれを説明して、それを評価するというプロセスを取っています。



遊具：HOUSE

未来は、あそびの中に。

偉大なる発明も、世界を変えた公式も、
あそびから生まれた。

あそびは、すべての創造の源です。

あそび力を伸ばすことは、未来を切り拓くこと。
創造力をのばす。共感力をはぐくむ。ルールをまなぶ。
あそびから、こどもは無限の力を羽ばたかせていく。

あそびの環境に、あざやかな驚きを。

私たちは、未来をつくる仕事です。



す。そして驚きの発見に関しても、必ずメモに残します。そして学期が終わった後には、こうなるだろうと想定していたけれどもそうならなかったことというのを振り返ります。というのも、この違いの中に、私たちの学びがあるわけです。想定していたおりのことしか起きていないのであれば、誰にとっても学びではありません。私たちの考えを変えることはできません。そして子どもたちの認知を考えれば、やはり教師にとっても認知を刺激し、私たちも学び続けなくてははいけません。感情、身体、感覚、さまざまな形で私たちの世界の捉え方が変わっていく。

そしてデジタルのツールに関して、小さな子どもであったとしても、何かを捕らえる。デジタルなフォーマットで何かを捕らえて、それを一定期間自分のものにできる。アイデアであろうと言葉であろうと物語であろうと、そういったものはすぐに消えてしまいます。保育室で一度聞いた物語をもう一度見直して、例えば、「この物語というのはこんなふうな可能性もあるんじゃないか」「もっとこれをより良く語る方法があるのではないか」と語ることがあります。例えば、窓の外を見て、「あの木は寂しそうだね」と子どもが言うときがあります。そのときから3分たてば、子どもはもう忘れてしまいます。でも「あの木は寂しそうだね。葉っぱが全部なくなって寂しそうだね。友達がいなくて悲しそうだね」と

言ったときにその写真を撮っておけば、事後にそれを振り返って、木がもっと幸せになるような歌を作ることができるかもしれません。実際作ったものがありますので、それを例えば翻訳していただければ、ぜひその歌も見えていただきたいと思います。

【CEDEP シンポジウム報告書から一部編集】

次号へつづく

(北海道・美晴幼稚園／東重満)

激動の時代、国の動き・保育界の動きをしっかりとキャッチ！

園のリーダーのために 保育ナビ

予測不能な変革の時代を迎え、園のリーダーにはますます学び続ける姿勢が求められます。そこで『保育ナビ』。これからも時代の動きをしっかりとキャッチしてお届けします。

B5判 80ページ 定価 1,100円 (本体 1,000円 + 税 10%)

コンテンツが
さらに充実！

解説動画も見られて※
よりパワーアップ！

※動画と連動しているコーナーを新設！

本社：〒113-8611 東京都文京区本駒込 6-14-9 <https://www.froebel-kan.co.jp>
ご注文・定期購読のお申し込みは 03-5395-6608 子育て支援事業部まで

キンダーブックの **フレーベル館**



2021年12月号より一般社団法人家族・保育デザイン研究所、東京大学名誉教授である汐見稔幸氏による年間連載を開始いたします。教育学、教育人間学、保育学、育児学を専門として第一線で活躍されています。幼児教育について注目されている今、より一層理解を深め、日々の幼児教育の参考にしてみてください。

「あらゆる形態の貧困をなくす」ことの意味

一般社団法人家族・保育デザイン研究所
東京大学名誉教授 汐見 稔幸

SDGsへの関心が高まっています。テレビでもこの言葉を聞くことが急に多くなったように思います。

SDGsは直訳すると、「持続可能な発展のための目標群」という意味ですが、一般には、ビニールゴミを増やさない、食品ロスをなくす、リサイクルを大事にする、ものをなるべく捨てない、など「もったいない」を生活信条にするような姿勢を身につけることのように受け取られています。

しかし、国連が発表した『2030 アジェンダ』（SDGsの内容、目標を示した基本の文章）の前文の第一段落には「・・・我々は、極端な貧困を含む、あらゆる形態と側面の貧困を撲滅することが最大の地球規模の課題であり、持続可能な開発のための不可欠な必要条件であると認識する。」という文章が

あります。続いて「・・・我々は、人類を貧困の恐怖及び欠乏の専制から解放し、地球を癒し安全にすることを決意している。我々は、世界を持続的かつ強靱（レジリエント）な道筋に移行させるために緊急に必要な、大胆かつ変革的な手段をとることに決意している。」と強い調子で決意を述べています。（傍点は汐見）

最も強調しているのは「貧困の撲滅」ということなのです。SDGsは女性差別の撤廃、質の高い教育をすべてのものに、あるいは陸、海、環境の保全等17もの目標を掲げているのですが、それらはいずれも貧困の撲滅ということがなければ空しいものになると、貧困対策を最も根幹の課題としているのです。

SDGsの1番目の目標が「目標1. あらゆる場所

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に準じた指導計画

月刊 保育とキャリア

毎月2日 発売



ひかりのくに株式会社

本社/〒543-0001 大阪市天王寺区上本町3-2-14 TEL.06-6768-1151代表
支社/〒175-0082 東京都板橋区高島平6-1-1 TEL.03-3979-3111代表

のあらゆる形態の貧困を終わらせる」となっているのは、たまたまではありません。SDGs は広い意味で人類が抱え込んだ「あらゆる形態の貧困」への闘いを宣言した文書とも言えるのです。

ところで、ここでいう「あらゆる形態の貧困」とは何でしょうか。

日本語には「貧困」と似た語に「貧乏」があります。「貧困」はお金がないという意味での「貧乏」とは意味が異なります。そうではなく、「貧困」とは、お金がないことすなわち「貧乏」がゆえに体験する、「自由に、そしてしあわせに生きるための条件を奪われている状態」と広く考えるべきです。私は憲法の条文を借りて、「現代における貧困とは健康で文化的な生活を営む条件を奪われている状態」と定義してはどうかと思っています。そう定義すれば「あらゆる形態」の貧困ということの実際が見えてくるはずです。

たとえば、日本ではシングルマザーの家庭で育っている子どもは 50%以上が OECD の定義による貧困家庭になっていて、その率の高さは世界で 3 番目です。年収でいうと 120 万円未満ぐらいです。そうした家庭で育っている子が 7 軒に 1 軒ぐらいの割合です。

保育料はたしかに無償化されてきています。しかしそうした家庭で育っている子の多くは、赤ちゃんのときからどれほど絵本の読み語りやおもちゃで遊

ぶ体験をしてきたでしょうか。親に余裕がなく、子どもに絵本を毎日読んでやるなどということなど思い浮かばないのではないのでしょうか。いろいろな生活体験をさせてやりたいと思っても、日曜も疲れている母親にそうした発想とは次第に無縁の生活になっていくのではないのでしょうか。親が不安を抱え、イライラしていれば、子どもにかけられる言葉もついついとげしくなっていくでしょう。

これらは、現代の貧困家庭で育つ子どもの多くは、文化体験の貧困、あるいは多様な体験の貧困、そして言葉の貧困、愛され体験の貧困等を体験せざるを得なくなっているといえるでしょう。

SDGs でいう「あらゆる形態の貧困」ということを、私たちはこういう風にとらえなければならないと思います。そうすると、SDGs の課題は、日本で子どもを育てていて必要な育児資源に恵まれない家庭への支援として普遍化させられなければならないはずです。

幼稚園では、そうした子どもたちに、意識的に遊びの豊かさの保障、絵本などの体験の保障、アタッチメント体験の保障などが考えられなくてはならないことになると思いますし、保護者への精神的な支援、そのニーズへの敏感な対応等が課題となっていくでしょう。

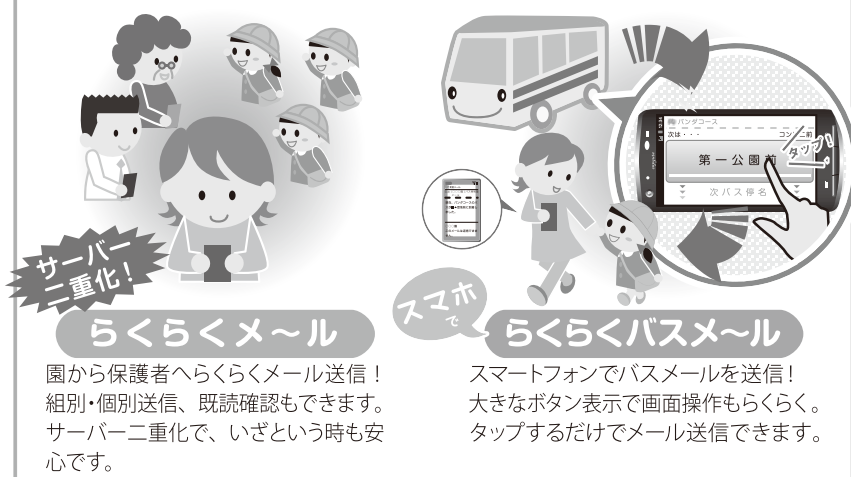
SDGs への取り組みをそうした視点から保育の質向上とつなげるべきでしょう。

(株)学研教育みらい

東京都品川区西五反田 2-11-8
幼児教育事業部

お問い合わせは 0120-833-415
フリーダイヤル

園ぴゅう太のメールサービス



サーバー二重化!

らくらくメール

園から保護者へらくらくメール送信！
組別・個別送信、既読確認もできます。
サーバー二重化で、いざという時も安心です。

スマホで

らくらくバスメール

スマートフォンでバスメールを送信！
大きなボタン表示で画面操作もらくらく。
タップするだけでメール送信できます。



**ぜ～んぶ学研に
おまかせ!!**

心機一転！
リニューアル

オリジナル！
**キャラクター
ロゴ**

Flashで
動画!

らくらくホームページ

目的やご要望に合わせて作成し、学研が更新
もお電話・FAXで対応します。
「お知らせ更新は園で…」というご要望にも
システム併用でご対応いたします。

こどもスマイルムーブメント

1年延期されたオリンピックの開催を控えた2021年3月、東京都は新たな都政の羅針盤として「未来の東京」戦略を策定しました。ビジョンの第一に掲げたのは「子供の笑顔のための戦略」です。

東京都議会においても、子供をあらゆる場面で権利の主体として尊重することを規定した「東京都こども基本条例」を全会派一致で制定し、4月1日に施行されました。

これを受け、東京都では、「チルドレンファースト」の社会を創出することを目的として、幅広い主体が連携し、現在と未来の子供の笑顔につながる「こどもスマイルムーブメント」を展開しています。

昨年12月、小池百合子東京都知事、野田聖子内閣府特命担当大臣（〈地方創生、少子化対策、男女共同参画〉、女性活躍担当、こども政策担当、孤独・孤立対策担当）、秋田喜代美氏（学習院大学文学部教授、東京大学名誉教授、こども未来会議座長）、香取慎吾氏（タレント）によるクロストークや子供との対話を核とするスタートアップイベント「キックオフ・アクション」を開催し、3,164名がYouTubeをライブ視聴しました。

東京都とムーブメントに賛同する東京都の私立幼稚園を含む900を超える企業や学校・団体は、「子どもを大切にする」社会機運の広がりを目指し、子供の目線を大切にした取り組みを推進していきます。

（イベントの様子は、YouTube「こどもスマイルムーブメントキックオフアクション」でご覧いただけます。）

（東京都私立幼稚園連合会会長、清瀬市・清瀬ゆりかご幼稚園／内野光裕）

何ひとつ取り残さない

園児は声のかけ方一つによって、自分の中での規範を色々と確立していきます。「はやかったねえ～」と先生に言われれば、早いことが良いことなのだと認識を深めていくことでしょう。幼稚園の幼児教育とはその声かけの繰り返しと見守りの中で、建学の精神にのっとり園児の成長を促していくことであると思います。また、どんな幼稚園でも命の尊さを否定する園はないと思います。ただ、これからの時代を生きていく子どもたちにとっては人間の命の尊さを感得していくことだけでなく、もっと大きな視点が必要とされていくのではないのでしょうか。地球という観点から考えた時、人も動植物も一心同体の運命共同体です。今の子どもたちには「誰一人取り残さない」という一人一人を大切に作る心と共に「何ひとつ取り残さない」という大きな視点を持って育てて欲しいと、またそんな子どもたちを育成していくことが令和の幼児教育には求められているのではないのでしょうか。

宮崎県幼稚園連合会では加盟園各園と様々な情報を共有し、また一体感をもった運営ができるよう学期ごとに「宮幼連通信」という機関紙を発行しています。その中では国や全日私幼連の情報、また宮幼連の活動内容を伝えると共に「名言集」や県内の「園長先生紹介」など、楽しみながら読んでいただけるよう工夫しています。宮崎県では令和3年度に新制度への移行率が100%となりました。これも一体感のあらわれなのかもしれません。今後も「誰一人取り残さない」と言う人間中心の目だけではなく「何ひとつ取り残さない」という大きな視点を持った子どもたちをたくさん育成していくことのできる団体でありたいと思っています。

「すごいSDGsだねえ～」

（宮崎県幼稚園連合会副会長、都城市・天竜第二幼稚園／佐々木慈舟）

主な会合予定

◎会議

2月28日 常任理事会 東京・私学会館

3月14日 団体長会・理事会合同会議 東京・私学会館

4月26日 常任理事会 東京・私学会館

5月9日 団体長会・理事会合同会議 東京・私学会館

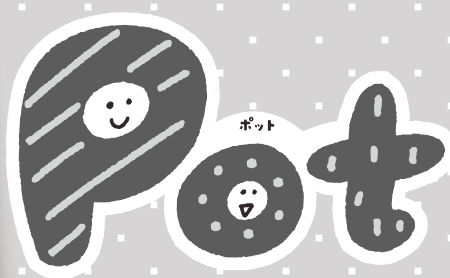
会合の日程は変更になる場合がございます。
予めご了承下さいますよう、お願いいたします。

編集後記

コロナ禍になり、マスクの着用が当たり前の時代となりました。子どもたちもマスクをつけずに歩いている人を見かけると「あーわるーい！」と言い、マスクをしていない人は悪い人という認識を示します。これは年少児以上の子ですが、これから言葉を獲得していく未満児さんにとっては、異常な環境になってしまっていると感じます。言葉を獲得する上で、やはりその言葉と共に、話した人の表情があるから言葉の意味を理解していけると思うのですが、今はそれが目元しかありません。一体どうなってしまうのだろうと不安になっていたのですが、そこはさすが現場の先生たち。目元の表情が実に豊かになってきました。コロナの変異株だけ話題になりますが、環境に合わせて先生もより良い方向に変化しています。これからもこの変化は止めず、子どもたちを見守っていきたいです。
(調査広報委員・遠州賢)



チャイルドブックの月刊保育雑誌



定価1,100円(本体1,000円+税10%)

www.childbook.co.jp/pot/



さらに「**Pot** 指導計画」は
毎月付録になりました。
指導計画はポットにおまかせ！

チャイルド本社

〒112-8512 東京都文京区小石川 5-24-21
TEL 03-3813-2141 FAX 03-3814-3392
www.childbook.co.jp/pot/

ご注文は、貴園担当のチャイルドブック販売店
または書店まで。